

# アースキン・コールドウェルの 初期の作品について

## 三 留 修

### 1

アースキン・コールドウェル (Erskine Caldwell, 1903—1987) の文学は、フォークナー (William Faulkner, 1897—1962) とくらべると評価は低い。フォークナーの作品は、マルカム・カウリー (Malcolm Cowley) の編集した『ポータブル・フォークナー』 (*The Portable Faulkner*, 1946) が出版されるまで、それほど一般に売れている作家ではなかった。それに反して、コールドウェルの作品は、出版と同時に売れて、ドラマ化され、舞台でもロング・ランが続いた。しかし、コールドウェルに関してまとまった信頼できるような研究書は、本国でもまだ出版されていない。彼は多作家で約50冊の単行本を出版している。小説、短編集、伝記、評論、紀行文など幅広く作品を残しているが、彼は1930年代には南部の白人貧農を描いた特異な作品で大いに注目されたが、第二次世界大戦の前後からは目立たない存在になってしまった。ここでは初期の作品について述べてみたい。

### 2

『タバコ・ロード』 (*Tobacco Road*, 1932) と『神の小さな土地』 (*God's Little Acre*, 1933) は、つづけて出版された。まずはじめに『タバコ・ロード』について述べる。

東ジョージアの農村で、かつてはタバコの乾燥した葉を詰めた樽が川までこ

ろがして運ばれた。今は使われぬままに荒れはてて、跡だけが残ったタバコ・ロードがたくさんある。現在はタバコどころか、綿花も野菜もできない不毛の土地で、ジーター・レスター (Jeeter Lester) という白人貧農の一家が住んでいる。ジータとエイダ (Ada) の間には17人の子供があった。5人は死んでしまい、10人はどこかへ行ってしまい兎口のために相手が見つからないエリー・メイ (Ellie May) とその弟の腕白ざかりのデュード (Dude) だけが残り、もうひとり一言の不平も言わない祖母がいる。

12歳で嫁に出された末娘パール (Pearl) の夫ラヴ・ベンジー (Lov Bensey) が、肩にカブラの入った袋をかついでタバコ・ロードをはるばるやってくる。彼は妻のパールが女房らしくしてくれないと苦情を言いに来たのだが、レスター一家の飢えた者たちには、そんな話は耳に入らずなんとかカブラを奪おうとねらっている。エリー・メイがラヴににじり寄って彼の気持をそらせている間に、レスターが袋を奪って近く森の中へ逃げだす。奪ったカブラを一家でとり合ってむさぼり食う。

つぎに説教師と称するベッシー・ライス (Bessie Rice) が登場する。ベッシーは、レスター家に行けと神様に言われた、といってまずジーターに祈りをあげ、ついで息子のデュードと結婚するよう神のお告げがあったと言う。前の夫の遺産で新しい車を買ってやると、デュードを町へ連れ出し新車を買ひ、役所で結婚の届けをしてレスター家へ帰ってくる。そしてほかの家族を家から外に出して、ベッシーはデュードをベッドにひきずり込む。家族はみんなドアや窓から中をのぞきこむ。車があれば薪を売りに行けるとジーターは考えて、町へ行くが1本も売れない。デュードは無暴な運転で車をこわしてしまう。そのうち一家に騒動が起こる。悪態をつくベッシーに、レスター夫婦は棒でなぐりかかり、出て行けとわめく。眺めていたデュードは、ベッシーに車を取りあげられてはたまらないと思って、いきなり車をバックさせると誤って祖母をひき倒してしまった。そこへラヴがやってきて、妻のパールがオーガスタの町へ逃げたという。それを聞いたジーターは、兎口のエリー・メイをラヴにおしつける。

風の強い晩、山火事の火の粉が、レスターの家の屋根のすき間に入りこん

で、あっという間に燃えてジーター夫婦は焼死体となって見つかった。

この舞台となっている土地について、コールドウェルは『タバコ・ロード』の序文で、

Their forefathers had seen tobacco come and flourish on these same plots of earth. But after its season it would no longer grow in the depleted soil. The fields lay fallow for many years. Then came cotton. Cotton thrived in abundance for several generations, and then it, too, depleted the soil of its energy until it would no longer grow. First, tobacco, and then cotton; they both had come and gone. But the people, and their faith, remained.<sup>(4)</sup>

と書いている。昔はタバコを植えていて、すこし前までは綿の栽培をしていた土地柄である。しかし、現在は土地は荒れはててたまたまで作物ができる状態ではない。食べ物も底をつき、ここ数日間は牛の皮の裏についている脂身でしのいでいる。ジーター・レスターは一応小作農ではあるが、地主は都会にひきあげ、土地は荒れるにまかせている。唯一の財源としてカシの木があり、オーガスタへ出て薪として売ればと彼は考えるが、一本も売れない。

75年前はジョージア州の中西部全地域のなかでも、一番有望な土地であったのである。当時、その土地はほかのどんな作物よりもタバコの栽培に適していた。以来75年たった今日でもタバコ・ロードはたくさん残っている。短いものは1マイルぐらいで、長いものになると25マイルから30マイルにもおよび、たった1日歩いても6、7本のタバコ・ロードに出合うほどである。

ジーター・レスター一家にはだれ一人まともな人間はいない。あまりにも貧しく、あまりにも無知で食欲と性欲しか残っていない人間ばかりである。それでもジーターは土地をはなれようとしないう。彼はつぎのように言う。

“That’s one thing I ain’t going to do! The Lord made the land, and He put me here to raise crops on it. I been doing that, and my daddy before me, for the past fifty years, and that’s what’s intended. Them durn cotton mills is for the womenfolks to work in. They ain’t no place for a man to be, fooling away with little wheels and

strings all day long. I say it's a hell of a job for a man to spend his time winding strings on spools. No! We was put here on the land where cotton will grow, and it's my place to make it grow. I wouldn't fool with the mills if I could make as much as fifteen dollars a week in them. I'm staying on the land till my time comes to die.”<sup>(9)</sup>

ジーターには荒れはてた土地から離れようという気持はさらさらない。50年間も使うだけ使って、土地がやせてしまってることなど考えもつかない。地主が種や肥料を貸してくれれば、まだこの土地でやっていけると考えている。これは農業に従事している人たちの共通の気持で、土地への愛着のほうが冷静な判断をにぶらせてしまう。ジーターが無知だからという一言で片づけることはできない。物質的貧困が、人間の精神を墮落させるのか、またはその反対に、墮落した精神が貧困を産むのかはだれにもわからない。

現在のアメリカでも、個人農場は金持の出資家に買いとられて、不在地主がどんどん増えているといわれる。そして農民が小作農になれる人はまじなほうで、土地から出て行くことを命じられる。『タバコ・ロード』に描かれている貧農の問題を、当時のアメリカ南部の問題と狭くとらえる必要はない。

喜劇の要素も『タバコ・ロード』の重要な特徴であるといわれる。ジーター・レスターをはじめ、登場人物のすべてが無知で、常識からはずれた行動をする。エリー・メイの兎唇やベッシーの天井を向いた鼻の穴は、悲劇的な肉体的欠陥であるはずだが、物語のなかでは喜劇になってしまう。女性にとっては深刻な状態も、彼女たちが明るいきどろか積極的に男を誘惑するので、肉体的欠陥もユーモアをかもしだす。冒頭のシーンでも、カブラをもってジーター家へやってきたラヴは、義父のジーターに妻のパールが自分と一緒に寝てくれないと苦情を言いに来た。しかし空腹なレスター家の者は、ラヴの言葉など聞こうとしない。エリー・メイはラヴを誘惑して彼の気持をカブラからそらそうとする。すったもんだの結果ラヴはカブラをジーターにとられてしまう。はじめから喜劇的なシーンが描かれている。暗い人間生活を描いていながら、読者は笑いをおさえられない。

救いになるところは、ジーターがエリー・メイの兎唇をお金が入ったら医者にみせてやりたいと言い、日ごろ口をきかない母親のエイダが、子供のことになる自分からしゃべりだすシーンである。

### 3

もうひとつの代表作『神の小さな土地』も舞台はやはりジョージア州の寒村で、タイ・タイ・ウォルデン (Ty Ty Walden) という男の一家を中心とした話である。

タイ・タイ・ウォルデンは、15年間も金の鉱脈をさがして自力で掘りつづけている。次男のバック (Buck) と三男のショー (Shaw)、2人の黒人を使って穴を掘っているところへ、検察官に立候補中のプルートー (Pluto) がやってくるが、彼は鉱脈よりも末娘のジル (Jill) が目当てである。人の良いプルートーは、タイ・タイに頼まれてジルを連れて、もうひとりの娘ロザモンド (Rosamond) の家へ行く。夫のウィル (Will) と一緒に穴掘りの手伝いに来るように説得することを頼まれたのである。無軌道に男関係をつづけるジルは、姉の家で義兄のウィルと関係をもち、姉に見つかり騒動をおこす。しかし、ウィルが勤めている紡績工場が不況のため閉鎖されているので4人は、タイ・タイの住むマリオン (Marion) へ来る。

やがて、9月が近づいてきたが、この年は農場の収穫が望めないで、ウィルの発案で、冬を越すために長男のジム (Jim) の所へ借金を頼みに行くことになった。彼は金持ちの未亡人とオーガスタの大邸宅に住みつき、タイ・タイの家に寄りつこうとしない。タイ・タイの一行はジムからやっと借金できたのに、バックとショーの兄弟がその金を山分けして散財してしまう。金を貸したジムは、弟バックの妻グリゼルダ (Griselda) の色気にまいていた。

ウィルはどうしても紡績工場で働きたい気持を捨てられず、工場へ戻る。その晩、工場のストライキのリーダーとして、ロック・アウトを破る先頭に立ったウィルは、守衛に射殺される。ウィルの葬式のあと、バックが妻とウィルとの関係を疑って心が晴れないところへ、めずらしく長男のジムが訪ねてきた。

彼は強引にグリゼルダを連れ去ろうとした。怒ったバックは格闘のすえ、ジムを猟銃で射殺し、そのまま姿を消す。タイ・タイはひとりで穴を掘りつづける。

『神の小さな土地』では、土地への執着、性、暴力が描かれている。この作品に出てくる登場人物は、『タバコ・ロード』の場合とちがって、無知な人間はいない。タイ・タイが15年間も金をさがして掘りつづける姿はまともではないが、長男は金持ちになり、他の兄弟姉妹もごくふつうの理解力のある人間である。ジルがすぐに男と関係をもったり、兄弟で殺し合いをしたり、父親が金を掘りあてる夢を見ている生活がまともとはいえないが、それほど異常なものではない。白子の人間を連れてくれば金を掘りあてることができる、などという迷信もよくみられることである。

物語の最後で、ジムを射殺したバックを前にしてはじめて、タイ・タイは自分の考えていたことを述べる。

“There was a mean trick played on us somewhere. God put us in the bodies of animals and tried to make us act like people. That was the beginning of trouble. If He had made us like we are, and not called us people, the last one of us would know how to live. A man can't live, feeling himself from the inside, and listening to what the preachers say. He can't do both, but he can do one or the other. He can live like we were made to live, and feel himself on the inside, or he can live like the preachers say, and be dead on the inside. A man has got God in him from the start, and when he is made to live like a preacher says to live, there's going to be trouble. If the boys had done like I tried to get them to do, there never would have been all this trouble. The girls understand, and they are willing to live like God made them to live, but the boys go off and hear fools talk and they come back here and try to run things counter to God. God made pretty girls and He made men, and there was enough to go around. When you try to take a woman or a man and hold him off all for yourself, there ain't going to be nothing but trouble and sorrow the rest of your days!”<sup>(3)</sup>

タイ・タイは、「人間ははじめてから体内に神様をもっている」と主張し、「男でも女でも相手をひとり占めしようとする、生涯いざこざや悲しいことが起こるんだ」と言う。彼は3人の器量のよい娘を授けられたことで神に感謝しているが、息子のなかには自分の言うことをきかずに外へ出て、馬鹿な人間に話を聞かされて帰ってきたので、ごたごたが起これたと考える。タイ・タイの考えは自分勝手なものだが、彼は彼なりに誠実で、信心深い男なのである。

『神の小さな土地』は、『タバコ・ロード』のジータ・レスター一家にくらべると、タイ・タイ・ウォルデン一家の貧しさはひどくない。長男のジムの金をあてにしているあいだは、何とか食べられるのである。わずかながら彼らにはゆとりがある。ただ、この作品でも、土地を離れることができない父親の生き方に一家の不幸がある。金が出るかどうかわかりもしない土地にしがみついて、やたら堀りまくるタイ・タイの身勝手な行動には救いがたいものがある。子供の数が多く、彼らは他の土地へ出て行かなければ生活ができるはずがない。

#### 4

『タバコ・ロード』と『神の小さな土地』の前に、『私生児』(*The Bastard*, 1929), 『あわれな道化』(*Poor Fool*, 1929), 短編集『アメリカの大地』(*American Earth*, 1931) が出版されている。この最初の短編集には「いちごの季節」('The Strawberry Season'), 「非常におそい春」('A Very Late Spring'), 「秋の求婚」('An Autumn Courtship'), 「さびしい日」('The Lonely Day')などの佳作を含む24編が収められている。短編小説の数も多く、150編にもぼる。人によっては、コールドウェルを短編作家として大きく評価している。最初に出版された二つの中編小説は話題にならず、『タバコ・ロード』と『神の小さな土地』で人気作家にのしあがった。

以後1940年までに実に13冊の単行本を出版することになる。そのなかで、『巡回牧師』(*Journeyman*, 1935), 『7月の騒動』(*Trouble in July*, 1940)がまずまずの作品であり、短編集『われら生けるもの』(*We are the Living*,

1933) と『のぼる朝日にひざまづけ』 (*Kneel to the Rising Sun*, 1935) にはやはり良い作品が数多く含まれている。とくに、「小春日和」 ('Indian Summer'), 「綿つみ」 ('Picking Cotton'), 「モード島」 ('Maud Island'), 「のぼる朝日にひざまづけ」, 「マーサ・ジーン」 ('Martha Jean') などはコールドウェルの特徴をいかんなく発揮している。短編集や自伝の話題作を除くと、コールドウェルの代表作はすべて1940年までに出版されている。

『巡回牧師』は、各地を巡回して歩く悪徳牧師の物語である。見知らぬ農家に立ち寄り、ただで寝泊りし、人妻を犯し、ピストルで傷害を犯し、インチキさいころで賭博をやり、金銭と自動車をまきあげる。このにせ牧師スィーモン・ダイ (Semon Dye) は、教会もない僻地の学校へ村びとを集めて入信状態におとし入れる。コールドウェルは、ジョージア、フロリダ、南カロライナの諸州で、何度も同様な人物を見たことがあり、この物語の主題は長年彼の心のなかにあたためられていた、ということが『わが体験』 (*Call It Experience*, 1951, 16章) で述べられている。

『7月の騒動』は、コールドウェルが黒人問題を正面から扱った作品である。黒人が白人の娘に暴行を加えたといううわさから、サニー・クラーク (Sonny Clark) という少年が捕えられ、群集の前でリンチを加えられたうえ、木の枝からつるされ、なぶり殺しに合う。被害をうけたとうわさされた娘ケイティ (Katy) は、リンチの現場にかけつけて、暴行事件はうそだと叫ぶが、時すでにおそく、暴徒と化した群集はケイティにも石をぶつけて殺してしまう。この作品も評価が高く、人によっては代表作にあげている。

W・M・フロウホックは、作中人物に対するコールドウェル自身の感情がいくら不安定で、あいまいなところがあるとしながらも、

Despite all the difficulties we have noted, Caldwell's novels have their place with those of Hemingway, Faulkner, and Steinbeck; and one of them, *Trouble in July*, is a really superior piece. His mixture of comedy and violence, when it works well, is a significant contribution to the novel of violence. Some of his creations have become part of our folklore: people who have never read a line of Caldwell



know all about Jeeter Lester, and apply to the form of degeneracy to which it is appropriate the slur, "tobacco-road."<sup>(4)</sup>

と『7月の騒動』を高く評価し、コールドウェルの『タバコ・ロード』がいかに広く知られているかを述べている。コールドウェルは白人の貧しい農民を描いた最初の作家である。今野望氏によると、氏の知りあったアメリカ人たちに、コールドウェルの作品は歪曲されたアメリカ絵図だから読まないでくれと言われた<sup>(5)</sup>とのことであるが、アメリカ人の知識人のなかには、あまりにも強烈にアメリカの恥部ともいうべきシーンが多く描かれているのに嫌悪感をいだく人もいたのであろう。

総発行部数6000万部とも7000万部ともいわれる驚異的な数字をあげているのは、エロティックな描写が好まれたためである。読みやすい文体で、ペーパーバックの表紙にはけばけばしい絵が書かれているものが多い。きまじめな研究家には、まともにとりあげにくい作家であるかもしれない。また、1940年以後の作品には大衆受けだけをねらったものが多いこともたしかである。しかし、舞台で何年もロング・ランを続けた『タバコ・ロード』と『神の小さな土地』を無視することはできない。これらの作品に登場する人物は世界中のどこにでもみられるはずである。南部の貧困を描き、社会批判を論じているといった狭い意味でとらえるのはどうかと思う。

## 註

(1) Erskine Caldwell; *Tobacco Road*, Pan Books LTD, 1964, p.6

(2) *ibid.*, p.101

(3) Erskine Caldwell; *God's Little Acre*; Pan Books LTD, 1964, p.186

(4) W.M.Frohock; "Erskine Caldwell: Sentimental Gentleman from Georgia," *Critical Essays on Erskine Caldwell*, MacDONALD, 1981, p.213

(5) 今野望; 『アースキン・コールドウェル研究』: 南雲堂, 1962, p.3